

右の写真は先に会場入りした女子美術大学 OMODOC（オモドック）の皆さん。かわいらしく飾りつけされたスペースでは持参のスピーカーから音楽が流れ、おめんや楽器を作るワークショップでにぎわっていました。こうした場の雰囲気づくりにも工夫を凝らしているそうです。きらきらしたモールやビーズ、紙などを材料にマラカスや太鼓づくりに没頭する親子連れの皆さん。あとからやってきた中学生たちも混ざります。工作をしながら、親と子、子ども同士、中学生のお兄さんお姉さんと小さな子どもたち、教えたり教えられたりの交流が深まります。



東北の子どもたちの元気よさ、発想の豊かさに驚きました！



みんな創作に夢中！

コンサートは打楽器ひろばとブラスコンサートの二本立て。打楽器・福島が黒いボストンバッグを手に見れると・・・中から楽しい打楽器が次々に登場！締めにはクラッピング・ミュージックで会場の皆さんと一緒に盛り上がりました。ブラスコンサートではとなりのトトロなど、みんなで口ずさめる曲を中心に演奏。みんなで一緒に行進しよう！と「さんま」に合わせて手づくり楽器を鳴らす音楽隊も登場。OMODOC の皆さんの先導で元気よく会場内を練り歩く子どもたち。一つの思い出として心に小さく残ってくれると嬉しいです。

この山元町を日本フィルメンバーが訪れるのは初めてですが、以前から三菱UFJ ニコスの社員ボラ

ンティアの皆さんが町の皆さんとの交流を深めてきた経緯があります。2014 年には日本ユネスコ協会連盟の協力も得て、親子ふれあいイベント「みんなで大きな絵をかこう！」を開催。《未来の山元のまち・夢のまち》をテーマに完成した 24 枚の絵が繋ぎ合わされ、参加者の思いが詰まった巨大な「夢のまち」が完成しました。この絵が、このたび完成したこどもセンターに飾られる予定で大切に保管されてきたのです。

役場の若手職員の方々が、センターの開所に奔走しやっと迎えたこの夏。真新しいセンターがまちの未来と日本フィルの奏でる音楽で満たされました。



子どもたちが描いた絵には明るい未来が詰まっています。

8月28日

三日目の朝、一行は朝市が開かれているという情報を聞いてゆりあげ港へ。「閑上（ゆりあげ）を元に戻すだけでなく、東北一の人びとが集まる観光地にしたい」という地元の方々の熱い思いで昨年から再開された地元の朝市です。ちょうど到着した頃には地元のバンドや東京からやってきた高校生吹奏楽部の演奏があったりと、市場の盛り上がりは最高潮。新鮮な魚介をあぶる芳ばしい香り、次々と差し出される海産物の試食。がごめスープをいただき心も体もあたたまりました。

名取のホテルからタクシーで 15 分ほどの道のりでは、運転手さんが被災当時の様子を語って聞かせてくれました。地面をまるごと約 4 メートルかさ上げしている工事現場の現場も通り、この目で復興の足取りの確かさと、道のりの長さを同時に感じました。写真は港から海を臨む風景。美しい景色、でもこの海が、と考えると初めて訪れる者には複雑な気持ちにさせられる景色でした。

さて、お腹をすかせたメンバーは海鮮丼で朝からエネルギーチャージ！地元の人びとの復興にかける思いとパワーを肌で感じたところでホテルへと戻り、最後の会場へ向かいます。



朝市は大勢の方でにぎわっていました。

最終日の会場は、名取市増田児童センター。精力的にイベントを企画する館長さんのもと、子どもたちがのびのび過ごせるスペースになっています。こちらの館長さんは、もともと保育士をなさっていた方。子どもたちと大人との距離が近く、子どもが一人でも安心して気軽に遊びに来られる施設になっています。

午後になり集まってきた親子連れの中には生後 8 ヶ月のお子さんを連れのお母さんもいました。「こんな近くで日本フィルの演奏を聴けるなんてほんとかな？」と思いながら来ました。」とニコニコしながら入ってこれました。

この日も、OMODOC の皆さんは早くから会場入りしてワークショップ。彼女たちは「ヒーリングアート」という分野を学びながら、それを社会に生かすべく様々な活動にチャレンジしています。

OMODOC とは、震災によるストレスをアート活動を通してケアすることを目的に結成された、《アートによる被災地のこども支援プロジェクト》。日本フィルの本拠地・杉並区での地域連携の一環で、区内にキャンパスのある女子美術大学と活動を共にしています。

ワークショップで作った楽器やお面を身に着けて、準備万端！コンサートの始まりは子どもたちの行進から。もじもじドキドキしていた子どもたちも、親御さんや近所の大人たち、センターの職員の皆さんが手拍子で盛り上がるなか元気に行進しました。ニコニコ笑顔を振りまく子、自作の太鼓をたたくのに夢中になっている子・・・未来を担う子どもたち一人一人にこれからも優しいまなざしを注ぎ続けていきたいと強く思いました。



できたよ！ハンドバッグ型のマラカスを両手に♪

あの震災から 5 年半。私たちの記憶は鮮明さを失い、現地を訪れる支援活動も少なくなってきたと聞きます。今、そしてこれから私たちにできることとは何なのでしょう。大きな悲しみを背負ったその土地で、こうして人々が集まって再び笑いあう。この小さな火をひとつ、またひとつ灯し、それが消えないよう大切に守りつづけることが私たちにできることなのかもしれません。日本フィル「被災地に音楽を」は、これからも音楽を届け続けます。